コンドミニアム

CONDOMINIUM

[上]

ジョン・D・マクドナルド

広瀬順弘訳

コンドミニアム

CONDOMINIUM

[上]

ジョン・D・マクドナルド

広瀬順弘訳

コンドミニアム（上）

ジョン・D・マクドナルド

昭和59年2月29日　初版発行

訳　者　広瀬順弘

発行者　角川春樹

発行所　株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話(東京)(265)7111 大代表

〒 102　振替　東京3-195208

印刷所　旭印刷株式会社

製本所　株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

© Printed in Japan

0397-791146-0946(0)

コンドミニアム（上）

CONDOMINIUM

by

John D. MacDonald

Copyright©1977 by John D. MacDonald
Japanese Translation rights arranged with
John Farquharson Ltd., London, through
Tuttle-Mori Agency, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

サラソータの良き時代に生き、海に流されて逝った次の人びとに、この書を捧げる――

ウォルター&マーゴ・アンダーソン　ジョージ&ナンシー・アルビー　チック・オースチン　フラン・バーリー　バート・バーソロミュー　レス・ベイリス　クロスビー・バーナード　グレン・ベリー　カール・ビッケル　ガーティ・ブラッシンゲーム　ドン・ブームハウアー　ローズマリー・ボウデン　ロス・ボイヤー　デーブ&サリー・ボイルストン　スミス・ブロハード　メアリー・ローレンス・ブラウン　チャールズ・ブランデージ　ビック・バタフィールド　カール・カーマー　トム・チャマレス　ジョン・Z・クラーク　ジャック・コールドウェル　ロイ・クック　ジョン・コルビーノ　トム&ベティ・クリスプ　ベン・カリアー　ペルハム・カーティス　オスカー・デラーノ　ビル・ドブソン　A・B・エドワーズ　リー・エガーズ　ジャネット・エルブグレン　レイ・エングラート　ロジャー・フロリー　サンディ・フレンチ　デービッド・グレイ　マーチン・グリフィン　チャーリー・ヘイガーマン　ランディ・ヘ

イガーマン　フィル・ホール　ベーブ・ハメル　ポップ・ハーバート　ジャック・ハッソン　オールデン・ハッチ　ラリー・ヘラーエドワード・バーリンゲーム・ヒル　T・ダナ・ヒル　アル・ハーシュバーグ　ラス・ホランダー　ルウ・ヒューズ　ケント・イネスイーズ・ジェンキンズ　ハロルド・ジョンストン　カールトン・ケルシー　ウォレン・ケンプ　ニック・ケニー　ジム・キックライター　バーマン・キンブロー　ビル・キップ　レジー・ラカッタ　ラリー・ラカーバ　ジャック&リズ・ランビー　エド・ランガー　ヒルトン・リーチ　ラリー・リーマン　レイ・リトレル　ジョン・ローガン　ジーン・ルードウィグ　エディ・マラブル　リチャード・A・A・マーティン　ウォルター・マーティン　ジョー・マークスマーレー・マシューズ　マイク・マツサック　パット・マクラーキン　クリート・マッカートニー　ジョン・マッカレー　オリバー・マッガウアン　ケント・マッキンレー　ビル・モージー　バート・モントレサー　ジョン・ニューウェル　ウォリー・ノートン　ブラッフ・オリン　ゴードン・パーマー　エミー・ピート　グレン・ポッター　メル・ポッター　ハリス・パワーズ　テッド・プラット

ジェイ&ヘレン・プロタス　ラルフ・パットホフ　フランク・ランボーラ　ローリング・ラウル　フィーリクス・ライゼンバーグ　ジャック・ロウズ　ウィリー・ロバーツ　ビル・ロジャーズ　ハリー・サドラー　ビル&ジャネット・シェア　デーブ・スコービー
テーラー・スコット　アーニー・シアズ　スクワイア・セスラー
アルボード・シーン　エディ・シールズ　カール・シュロード　ネッド・スキナー　ジーン・スパノス　ウォレン・スパージ　ロイス・スタインメッツ　ベッキー・スターリング　ジョージ・ストーム　エルマー・ズルツァー　ハンク・テーラー　ライル・トンプソン　ロージー・ツーム　マクシミリアーノ・トラッチ　バート・トウィッチェル　ルイーズ・ウーツ　ビル&ローラ・バン・クリーフ
テッド・ワッカー　ポール・ウェイナー　デービッド・ワード　ビル・ワトキンズ　ジョイス・ウエスト　ドーシー・ウィッティントン　フレッド・ウォルトマン　エド・ヤンカー

『ハリケーンの間隔があまり長くあくのは非常に危険なことである。多くの人がその破壊力を忘れ、その話を信じようとしなくなるからだ』

フロリダ州マイアミ
国立ハリケーン・センター元所長
ロバート・H・シンプソン博士

1

ハワード・エルブライトはやっと管理人のジュリアン・ヒグビーを見つけた。ヒグビーはコンクリートの柱にもたれて、二人の若い女が低い飛び込み台から交互にダイビングしているプールのほうを見やっていた。

「すいません」エルブライトは言った。「管理事務所にいる女の人が、テニス・コートだろうっていうんで、先にあっちへ行ってみたんですよ」

ヒグビーは全然何の反応も見せなかった。エルブライトの横で太い、日焼けした腕を組み、同じように日焼けした骨太の足首を交差させて柱にもたれたまま、動かない。肉付きのいい大柄な男で、薄いブルーのスポーツシャツと濃いブルーのショートパンツにかくれていない部分は、強い日射しで脱色したような白い毛でおおわれ、がっしりしたあごにも白っぽいひげがわずかに伸びている。まだヘアピースを使う齢ではないが、ひたいにかぶせるように丁寧になで付けられたとび色の髪が、てかてかと光ってかつらのように見える。

ハワード・エルブライトは一瞬、この相手は耳が聞こえず、視野も狭いのかと思った。なにか自分が透明人間になってしまったような錯覚をおぼえる。最近、何かの売り場で売り子にいくら声をかけても

無視されて苛々している夢を見たが、そんな気分である。

「すいません！」彼は声を高めてもう一度言った。

ヒグビーのからだは相変わらずプールのほうを向いたままで、口だけが動いた。「あんたのいう、管理事務所の女ってのは、あれはわたしの家内。つまり、ミセス・ヒグビー――ロリー・ヒグビー」ヒグビーは奇妙に甲高い声で、耳の遠い相手にでも喋るようにゆっくりと言った。

「わたしはべつに――」

「テニス・コートへ行ったのは、1Gのシミンズ大佐が、二面あるコートのうちの西側のサービス・コートのバウンドがおかしいっていうから。実際にサーブがどう変なふうにバウンドするか見せられてね。たしかにバウンドはおかしい。しかし変なふうにバウンドするのは大佐のサーブだけじゃない、みんなのが変なふうにバウンドするんだ」そう言うと、ヒグビーは急に振り向いてハワード・エルブライトを驚かせた。「てことは、みんなあいこってことだ――そうじゃないですか？」ヒグビーの声はしだいに大きくなった。

「わたしはテニスはやらないんで――」

「とにかく、わたしは大佐に言ったんだ、いつもみんなに言ってるようにね――組合で取り上げなさいって。そのために居住者の管理組合はあるんだから。そのために理事たちは選ばれたんだから。そして管理組合で、どこをどうしてもらいたいということになったら、それができるかどうかわたしのところへ相談に来る。それが筋というもんでしょう？」

「ええ、そうですね」

管理人は茶色に焼けた大きな手を差し出した。「ヒグビーです。もしこの美しいゴールデンサンズ・コンドミニアムの分譲をご希望でしたら、あと残っているのは、5Aと6Eの二つだけです。どちらもメキシコ湾の息をのむようなすばらしい眺望が得られます。もし賃貸を希望されるなら、家具付きの美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しい部屋がまだいろいろと――」
「いえ、4Cにもう入ってるんです」
ヒグビーは一瞬ぽかんとして、それからにやりとした。「ああ、そうそう。どこかで見たと思った。おとつい入居されたんでしたな？」
「いや、十日前です。正確には、五月三日です」
「新しい快適なライフスタイルの殿堂、ゴールデンサンズへようこそ。お名前は……いや、言わないで。どうか言わないで」ヒグビーは目をつむり、頭をさげ、手の甲を唇にあてて、かすかにハミングするようにうなった。「エルモア！」大きな声をあげる。「そうでしょ？」
「近いですね。エルモアでなく、エルブライトです」
「ま、似たようなもんだ。何か用ですか？」
「リストを持ってきたんです」
「リスト？　何のリスト？」
「直してもらわなければならない箇所のリストです――4Cの」
「直してもらわなければならない？　それはずいぶんきつい言葉ですな？　何か文句でもつけようってんですか、エルモアさん？」
「エルブライトです。いや、文句をつけようっていうんじゃありません。ただ、新しい建物に入居した当座は、どうしても住むのに不都合な箇所がいくつか出てくるものなので、たとえば、エアコンの――」
「事務所へ行きましょう――おたくのファイルを出しますから」
ヒグビーは先に立って、ガレージを突っ切っていった。ゴールデンサンズ・コンドミニアムは八階建ての建物である。ガレージと玄関ホールと管理人の事務所と住居が一階にあり、二階から上がアパート

になっている。各階の住宅戸数は七戸で、二階が1Aから1G、三階が2Aから2Gというように住宅番号がわりふられている。ただし最上階の八階は、ペントハウスのテラスがあるため、五戸しかない。したがって、全部で、四十七戸とそれにプラス管理人の簡易住居である。建物全体は厚みが分譲住宅一戸分の白っぽいコンクリートのビルで、真ん中でブーメラン型に折れ曲がっている。わずか四エーカーの狭い土地に建っており、後ろの角の部分のすぐ向こうには、ウォーターオーク、パルメット、マングローブなどさまざまな樹木や蔓植物の生い茂っている未開の密林がすぐそばまで迫っている。凹面をなしている表側の前には、比較的交通量の多い二車線の海岸道路が通っており、その先に、二つの背の高い、海岸沿いのコンドミニアムにはさまれた砂浜があって、その向こうに青い広大なメキシコ湾がひろがっている。

ヒグビーは急に立ち止まって振り返り、大きな手をハワード・エルブライトの肩に置いた。そして左のほうを示して言った。「あれを見て！　まったく、あのとおりなんだからね」

エルブライトが示された方向を見ると、一台のシルバーグレーのオールズモビルが、先端を物置のコンクリートの壁に向けて止まっていた。

「わかるでしょ？」言いながら、ヒグビーはポケットからスチールのメジャーを取り出してオールズモビルに近づいた。後ろの車輪がオレンジ色の境界線の上にのっている。ヒグビーはまず横にはみ出ている部分にメジャーを当て、それから車の前へ行き、壁からバンパーまでの距離を測った。

「これはハスコルさんの車ですよ――5Fの。今度は横に十四インチ、後ろに八インチはみ出してる。その結果、どうなるか。これで、あそこに車が止まったら、だれもこの隣のスペースには駐車できない。そうでしょ？　そうなると、どういうことになるか。わたしがテレビを見てるところへ必ずだれかが、車を駐められないってどなり込んでくる。あの人にはもう何度も、十回以上言ってるんだ、奥さんがちゃんと駐車できないんなら、駐車するときだけは代わってくれってね。それが無理な注文？　線の内側

に駐めてくれっていうのが？　バンパーを壁につけてくれっていうのが？　それが無理な注文？　ほんとに、あんたらここの居住者はいくら年寄りが多いったって、せめて車を駐めることぐらいきちんとやってもらわなくてはね」

ハワード・エルブライトは自分よりはるかに年下の男の怒った顔を見つめた。首筋を血がのぼり、耳が熱くなるのを感じる。むろんエルブライトは、ここで腹を立てるべきでないことは知っていた。

「あんたらここの居住者？　そんな言い方はないんじゃないですか？」

「どうして？　どう言ったらいいっていうの？」

「そんな侮蔑的でなく、もっとほかに言い方があるでしょう？」

「何的？」

「侮蔑的。あなたのお給料はわれわれが払ってるんじゃないですか？」

「あんたたちが払ってるのは、管理サービスに対してですよ、エルモアさん」

「エルブライト。だったらもう少し居住者にサービスするという気持ちを持ってもいいんじゃないですか？」

「どうして？　ああ、そう。あのね、あんたは勘違いしてるんだ。わたしはあんたたちに雇われてんじゃないの。わたしらの雇主はガルフウエー管理サービス会社。そしてガルフウエー管理サービスがこと二十年契約を結んでるの。つまり、ロリーとわたしはガルフウエーの社員てわけ。だから何もあんたたちに気に入ってもらわなくてもいいんだ、会社に気に入ってもらえればね。あんたたちはわたしらをどうすることもできないんだから。ま、あまり無駄に腹を立てんことですな、エルモアさん。だいたい、わたしらなんか、次にここに派遣されてくる連中よりずっとましかもしれないからね。もしこの管理方式がよくわからなかったら、マッギニティさんにきいたらどうです？　7Bのピーター・マッギニティさん。彼がこのゴールデンサンズ居住者管理組合の理事長だから。あの人もこの管理方式は気に入

らないようだけど、もう決まっちまったもんだし、ほかに方法はないからね。それより、早くそのリストとやらを片づけよう.じゃないですか」

ふたりは玄関ホールから、二基のエレベーターとは反対側の小さな管理事務所に入った。ロリー・ヒグビーはタイプを打っていたが、ふたりを見てその手を止めた。小柄な女性で、黒っぽい髪を長く伸ばして顔の両側に垂らしている。ふつうだったらその髪が視界の邪魔になりそうだが、彼女の場合は目が、鋭くとがった鼻梁の両側に寄ってついているのでその心配はない。横から見たら、長い髪と、その途中からとび出している鼻の先端が見えるだけである。前から見て目につくのは、小さな黒い目と長い鼻と、赤く熟れたような厚い下唇だった。

「フィッシュさんから何度も電話があったわ」ロリーは夫に言った。

「何だって?」

「言わないの」

「4Cのファイルを出してくれ」

ロリーはファイル・キャビネットへ行った。彼女は脱色したジーンズをはいていた。それは、最上の部類に入ると思われる彼女の皮膚とほとんど同じくらいタイトだった。ハワード・エルブライトは彼女の黄色いTシャツの下で何にも束縛されずに自由にゆれている乳房を努めて見ないようにした。

ロリーからファイルを受け取ると、ヒグビーはいちばん大きな机について、エルブライトに来客用の椅子にすわれという手ぶりをした。「そのリストってのは? この人は何か文句があってそのリストをつくったんだとさ、ロリー。リストをな」

エルブライトは財布から紙片を取り出すと、それをひろげてゆっくりと読みはじめた。「給湯蛇口からのお湯が、温かい程度で熱くない。雨が降ると、居間と表側の寝室のガラスの引き戸の下から浸水する。冷蔵庫内の棚が二つ不足。エアコンのコンプレッサーから大きな異音が発生している。シャワー室

のドアが完全に閉まらない。小さいほうの浴室のお湯と水の蛇口が逆になっている。大きい浴室の浴槽が一か所大きく欠けている。一つの衣装室の内側が塗装してない。二か所のコンセントに電気がきていない。居間の外のバルコニーの手摺に大きな割れめがある」

「それだけ？」

「いまのところは」

「いまのところは？　そう、あのね、引っ越してきた日にこの事務所に来たことは憶えてますね？」

「憶えてます」

「ここへ来て、それからどうしました？」

「どうしたって……あなたから鍵と印刷物を一束もらった」

「いちばん大事なことを忘れちゃ困りますよ。わたしとロリーの前でこれに署名したでしょう？　印刷物と一緒にこれのコピーも渡したはずです」

その書類の文字はひどく小さくて読みづらかった。それを何とかたどっていくうちに、ハワード・エルブライトの顔はしだいに曇っていった。彼の住宅専有部分はすべての点で満足であり、工事はすべて完了しており、今後工事あるいは設備のいかなる不備・欠陥に対しても売主および建設会社の責任はいっさい問わないという文書に署名してしまっていたのである。

「これはただの形式だって言ったでしょう？」エルブライトは相手を責めるように言った。

「そうですよ。つまり、分譲住宅の引き渡しを正式に完結させる証書です。もしこれの効力が信じられないんなら、弁護士にきいてみなさい。要するにあんたとしては、入居する前に一日か二日かけて全部調べりゃよかったんですよ」

「しかし、家具がもう届いてしまってたから――トラックで――」

「一時貸倉庫に入れるか何かしてね。とにかくいまとなっては、わたしにできることは――その足り

ないっていう冷蔵庫の棚、それは問題なくすぐ補充できます。たしかどこのかわからない棚がいくつか物置にあったと思うから。それからエアコンは――あれに保証書が付いてたでしょ？　それを見れば、販売店がわかるから、あんたが自分で処理できるんじゃないですか。いや、ほかのことだって、あんたがリストに書いたことは大部分あんた自身で何とかできるはずですよ――水道屋を呼ぶなり、電気屋を頼むなり、ペンキ屋を雇うなりすりゃいいんだから。もちろんわたしがやってもいいですよ。ただしその場合には、ガルフウエーの料金プラス十パーセントということになります。そう、どっちのほうがいいか――わたしに任せて、ガルフウエーを通してここを施工した業者にやらせたほうが、十パーセント割り増しになっても、あんたが自分で不慣れな土地の業者に頼むよりは、まあ、割安でしょうな。それに、ガルフウエーが請け負った場合には、支払いは毎月の管理費や地代やリクリエーション施設費などと一緒でいいんですから」

「しかしいずれにしても、これらの欠陥に対して金を払わなければならないというんですな？」

「いまとなっては無料サービスはちょっとできませんな、エルモアさん」

「エルブライトです――どうか間違えないでください。こういうふうに連想したらどうですか？　わたしはその証書をろくに読まずに署名するなんてあまり利口（ブライト）じゃなかった。そう憶えとけば、エルブライトとすぐに出てくるでしょう？」

「それはいいや。なかなかユーモアがおありですな、エルブライトさん。え、そう思わないか、ロリー？」

「ええ、ほんとね」ロリーはまったく関心のないさめた声で答えた。

「もう二度と忘れませんよ」ヒグビーは言った。「わたしの記憶力は抜群ですから」

「ふん」とロリー。

「そのリストどうします？　わたしに任せますか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com